

どーーして即興演奏をしたのかが知りな人は教えて〜

アントニ・ヤハホールに落ちて見越しの松は夜明けに分製した自己を葬る昔話の首筋を舐める舌の長い黄金のタラバガニに丈夫な改訂ウォーレス線を巻きつける

第五列各論

一九八〇年七月一五日発行

編集 第五列 地方版

5TH COLUMN TAPE REVIEW

エオナビア・クーデターは、2・26が勝つしまった様なケースで月革命のバロディではないのか！



「即興がレコードに対して規格外のものではないこと。もはや即興がレコードに対して上位ではありえないこと。レコードが即興を規格化することである。そういう構成に対してレコードをつくること自体が反対されることは自明である。(中略) 音楽の解放は非拘束ではなく非音楽にいきつくしかない。……」ごもっともな意見と言えよう。いわゆる《音楽》はそれ自体拘束の体系であり、《レコード》はそれを補強するものになっていく。それならば、どうすればいいのか？ 前述の発言をしたミュージシャンのように、日和つてテクノ・ポップたか何だかを演奏し、レコードを出すことが、反対されないこと(むしろ体系=体制への加担であること)は自明である。

即興演奏に関して基本的な問題は、演奏するか／しないかに尽きるのである(かもしれない)。「音がよくて言葉が貧しいならばその音は片手落であり、言葉が豊富でありながらすぐれた音を發せないならば、その言葉を吐いた者の内容は二セモノである」などと教訓的なことを言うエセ評論家たちに対しては「ゴタクを並べてない自分で自分でされた音とやらを出してみなよ」と言っておけば十分である。(うん)

自己顯示的／自己陶酔的／痙攣的即興演奏はもはや過去の遺物でありぶざまなものでしかない。狂えますむような幸福な時代は既に終っている。

即興演奏は目的を持たない。そうでない演奏は、少なくとも《曲》の再現ないし変容という目的を持っている。

味と音の健康食いか。

私は不可知論者ではないが、《即興論》に関しては沈黙こそが最も雄弁なのではないかと思いたくなることもある……。《論》ばかり空回りさせて、実際に《即興》をしない人間が多いのにはうんざりする。彼らの躊躇の理由は、非常に音楽的であったり文学的であったりするが、《即興》は別に音楽的である必要も文学的である必要もないのだ。

《即興演奏》は演奏そのものに近づいた行為である。それは難しいようだが実は簡単である。

ある演奏を「おもしろい」とか「つまらない」とかいうのは、既にその演奏を読んでいることの表れである。演奏自体はおもしろくもつまらなくもない。

コトバと音楽とは本来無関係である。

「然性のある者」でも「然性のない現象」ある。

音が乱すのではない。耳が乱すのでもない。目が乱すのである。

「即興」は「即興の即興」の即興である。

